

潮の躍るを覺へ感激の淚滂沱として双頬を濡し、雄渾の氣魄溢溢し生に對する希望の微笑を祝せざるを禁せず、宜なる哉聖日蓮の精力絶倫の目醒しき社會改造の叫びはこゝに放たれる事を。日蓮の生に對する微笑や如何ばかりなりしならん。

『あゝ吾人は生きんこせば日蓮の宗教ならざるべからず』さあれ一步齧つて京都に遊ばんか、京の町を包む山々のシットリと蒲團着たる愛くるしい姿——、滾々として絶へぬ加茂川の清き流。げに京都は山紫水明の都なりの偽りならざるを覺へぬ、殊に夕闇のヒシ／＼と迫りて涙ぐましい様な燈影が、靜かな京の町を照して闇の世界を消して行くとき、傷み易い人の心にはさらでだに一脈の淡い哀愁が起つて來る時、嘗つて得たりし安房の雄渾の氣失せて、誰か敢ない人生を思はざらんや、宜なる哉、聖親鸞の欽求淨土の宗教のよつてもつて人生一面の眞理を穿てるを。

吾人は朝に聖日蓮の教に依つて人生々存の微笑を識得し、夕には聖親鸞に依つて偽らざる人生苦痛の懊惱を味得するを得んぞやせんか？

日蓮の宗教やその旭日の如く、親鸞の教やそれ夕日の如し、嗚呼吾人はこゝに至つて苦樂思ひ合しての聖語を透して、日蓮の能除所幽冥の教を聞き、以て悟り涅槃の寂靜に遊び、不斷の本佛の御懷に抱かれて生きむ。

耳を澄して聞け！久遠の恵む梵鐘の響を！

「今此三界是我有吾中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護」

遠藤 兼 溪

勅諭立正大師號謹賦 次東溟韻

宗徒唯畏帝王言

立正名聲萬古存

安國至誠誰所比

開浮第一大師尊

恭賦曉山雲頌宮中春

富嶽巍然對曉光

大千今日入新陽

雲如賀客頻來往

乃想宮庭拜聖王